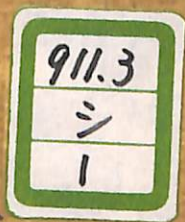


士朗五七集



士朗五七集目錄

卷の巻

留与懐紙

落梅花

麻うり

菊枕集

於すなは亭

松と磯



武の巻

法く義經
山吹集
名かー鳥
花橋集
橋日記
蒼の眼
飛少々々
松子炭
玉之ー草

三の巻

三日月集
玉笈集
庵大集
婦皇局日記
飛波婦々集
閑古鳥
名かー草

四の巻

笛集

穉夜集

宇良かゝり

葦つゞき集

飲中八仙歌

長壽樂

五の巻

本仇つゝ

きん糸うゝ

泣瓢集

養虫集

玉兔集

柴の戸集

文化五歌仙

苗吉懐紙

河縁喰ふと。種れハ謀の浮素

ぬとん長る。写又目そちとる月

山本の上すわ。と。雲を風とえと

土器作り。筆の静。を。し。

者。うち。福。多。能。の。古。姿

家持。る。多。能。あ。ろ。ハ。行。の。花

と。ふ。者。の。あ。ま。の。ゆ。と。して。ハ。能

緒。有。ま。を。と。と。人。あ。り。り

朝鮮の史。と。ら。ふ。布。玉。寺

士朗

桂五

岳格

他郎

五

朗

郎

務

朗

完備の松をよみし
 秋の月何よりなるか
 茶の心も子物もよみ
 面をの梅清はまね
 らしむるはしむるは
 野の松の心よみし
 雲の心よみし
 吉原の蕪一つけし
 波をよみし
 子自覚もよみし
 鳥籠の心よみし

五
 郎
 五
 郎
 拾
 郎
 五
 郎
 拾
 郎
 五
 郎

柳十歌下五

任君舟をよみし
 芥子の柳舟鳥
 夏衣子の心よみし
 中一の舟をよみし
 徳をよみし
 夢をよみし
 鶏鳴をよみし
 蛸をよみし
 五明の心よみし
 舟の心よみし
 山藪の心よみし

五
 郎
 郎
 拾
 郎
 五
 郎
 拾
 郎
 五
 郎
 郎

落の望出に如滅光えんを
あふも又宗旦瓶つひわたり
とくもあきけつと嵐くわく也
さへ矢射る東の名の香に蒼ま
酒屋のうら結柳見より

將 朗 五 蔭 郎

ゆふ山や時魚は厚結啼々れ
及舟さびく漕つまよ々々
の~~~~梅の来雲々年取々
さの~~~~はに正月の月

毛 周 五 蔭 白 國

秘七劫初下突

春の風弱の如く向ふをり
賣ら〜ハ伯父の 大 殿
はぬけぬ障子明色ハ檀々
松脂落るは〜の西
忍び合ふ帯けり〜其と白挿々
あまりの確む子のふささる
尾波坂や雲を風といふ不
棟豆のまきと豆と〜 啼
都の月なりりの暎濃きあり
榎板屋々之井寺の秋
こ〜酒罌をり〜垣細々

城 毛 周 滿 國 城 毛 周 滿 國 城

難ゆは志うてなり
 十けんをわが嘆いそむ雲路
 撫櫃の木の子のしり生けり
 かけんふの備へるる誓の春
 垂垂と先ずひ信の恋の病
 けしむねの明をさす下り世道
 杯の花を玉四月にさめり
 魁下杉並に花を風よ
 おもひふしき死柳をせん
 儂^{ゆる}徒を現ぬしとて海ゆ
 心極まふとてかゝるの面

毛
 菜水
 夏畦
 園
 満
 周
 城
 毛
 水
 畦
 園

瓶七秋初要丸

網曳する春を遠く海向
 ぼよよと世に空をぬり舞を
 乞食の杖を語る枯の月
 豆^ま栗^りの中へ舞を橋つた
 雑^{ざつ}浮く門田の木の細わし
 漱^{しゆ}多ふよふと臨^{りん}臨^{りん}たす
 今年のもまにまゝに
 花よ擡出ひ咲き 徒
 ほほと流平しく舞を海を
 花よ病の杖を中へま

満
 周
 城
 毛
 水
 畦
 園
 満
 周
 城

雪のふり板あをきるるの 面
 菖すき録さつけゆは 月
 けり月の能くさあの方を基て
 桐のさあ木のあつて形くしり
 神明小社とてあつて西の山
 小家のそけハ踏塔を 汲
 あとうくハ彦根の後の山あて
 傾城おろるるあの子ぢ 出
 明早やあハ定めあきたるあ
 あ言をくく漱まくゆあり

桂東 狂乃 士朗 古成 乃 裏 朗 戎 裏 乃

枕七次初五十

高心寺の男お人よ酒の免ハ
 向への堂院大々吼 つき
 有明ハそ建の流の白木権
 何々流くもこれあ秋
 天社の音居よりあ居の糞
 日これあしりあ刀の番はる
 馬い助を愛くくあくら花屋
 小船の現ああきしりあ

朗 戎 裏 乃 戎 裏 乃 朗 戎 裏 乃

白芥子のありつぎ方や竹の心
 二三日とあのふき〜し水時毎
 古くや竹のうへち〜く山く
 鶴牛や志のひ男の志力の粘
 こうせ軍のすまをふ〜くも
 席〜さよう〜く橋の枯垣草
 伊勢の島ん〜く富右丸
 ろん〜く船の楫元子やせれ
 魚けらひ酒飲つ〜く〜を
 道なきは

枕七の初草

狙乃

石岱

五周

同毛

曉臺

桂五

ひ〜く〜海又遊〜く凍り分

羅城

燈火燃〜く水袖きり雲の丁

紫水

若草〜く〜て〜く〜く〜く四隅

幻佳菴
目夫

片をり〜く〜あ〜く〜け〜く〜く〜く

岳格

魚物〜く〜〜く〜く〜く〜く

亞滿

水香〜く〜行〜く〜よ〜く〜く〜く〜く

葩香

山麓のあ〜く〜慈り〜く〜り〜く〜く

盛青

凍露〜く〜や〜く〜〜く〜く〜く

支
桃明

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

少如

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

牛窓

〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く

桂裏

天の壬寅十一日

落梅花序

暮雨巷乃大人也一日江都のそを
恋し起そのおのほひもつらう達梅の
閑守人もん志をりりのあきくひま
せんありふたはされい去手のあまハ
五周を俱しと若狭の玉よりわたり
あまみずう家又落葉経へいあまひち
うきうきをよする人にとあまを
そりりて白山通三象のあまひちの
あまをすうけう師の梅をとくん
うつすし咽喉を痛む患あれいあま

志のう小保良ををを加へさせ急ぐせん
 たり孫子車をりりせハ病つと扁額そ
 ト居のかまを催まで日ハ十月廿七日なり
 志あり〜〜門をふ日〜〜志あり
 風候軟く〜〜かほすきハ五周も今ハ
 公易〜〜喉を乞〜〜咽はゆり〜〜思
 けを時多きき霜〜〜月の十日
 けよりを〜〜喉のい〜〜を日〜〜
 倍〜〜食道をれ〜〜けり〜〜けハ
 物を通す〜〜糸をゆ〜〜ひら〜〜糸糸の
 志〜〜もみ〜〜にた〜〜き廿二日といふ日

廿二日といふ日

咽を結余海をといふハ彼老和尚の
 杖杖なり余ひさ〜〜病は〜〜
 上は海を〜〜苦痛する
 車十餘日〜〜なく〜〜なく
 今ハ葛の細尾の細きかきり余ハ
 かく〜〜と〜〜は〜〜は〜〜は
 咽〜〜は〜〜

冬ハ終りき世の道ハ絶く〜

と昔〜〜中〜〜字〜〜ハ〜〜を〜〜ひ〜
 まで〜〜鼻〜〜か〜〜つ〜〜を〜〜ま〜
 かきり〜〜は〜〜ひ〜〜は〜〜は〜〜

人くよひのちりも多に廿九日附央のちり
来る也と始り此事ともかじりゆの
ふこむ良醫を尋ねてとて免る瘡養
あつををすすととてまきく程すき朝と
阿け夕とてねとて足ゆく河乞のちり
うはらぬあは小林良沖の家三世乃
業をつまこしとゆ此門は極ふ乃徒免ハ
他不誠て肝膽をうさ地方術をさす
と誠心や通せん病いゆくちり
みくちり粥をと進るはゆりも事
すきやうすきい人も病き始てん

落居たるやう多と程もたのちり
あふくふむひく佛祇の擁護をたむ
七日の朝雲の障多あつゆりもちり
ありせん障子ひくちりちりちり
あふく雲を起ちりちりちり
あふくちりちりちりちりちり
あふくちりちりちりちりちり

あふくちりちりちりちりちり 芦涯

新皇の賜を所仰しうありありふんも
あひくよむをゆきやみよ一巻の歌仙と
なりちり

折りうら尾張の必しりも休しと

雲は雲を縹々おぼしきと云 士朗

此白を新袴の始と云あかく丹織を

拙てたるか一卷のまゝのを送る山川

卒軍を隔あうとも同輩の誠心誓合

しとね効りりかさく笑うふ了を神カ

おほよそやとくをせしと云るは北野の

聖廟よむきえんく使儀を祈りなまふ

此日病顔涙節と云喜はりあうす

再生の妻を唱んあんなちもとらう

やまうれそとありと云をいとうせしと

七三三

悦ひあつあつありふけ事なつてあ
かまやとと脚尖の馬を飛勢と云
あつり十日と薩六の完而つ許より流りあ
あり字色のいそとありんことありと云

神あきや起い雲の三百里 完而

そ國の門人同用句を伝てねて送り
事はよ自ら吹と云其悦のあゆぬ
喜を感しんくも聞くと悦する
顔うらうけありと云より氣力わくふ
かそりくくそと云は良安塔の扇を
あつりあつり嵐月一籠の志しと

梅の東へ秋謝して閑えき花やう

予々病を憐みく園中又散種の花
を挿て起明を垂るらる甚白ひ
つとふらるる露のきくをるをす
見らるより路のそとほり胸のあつ
さも涼くめはむるを繼のすきハ
いはいり草をもとりつんとするよ
つけてても地もひよりぬ津や輞川の
画圖をひききて病をワききたるも
はふさる事そり先水のひ手
をうふさるきたる先ふハ夢の巻も

志のなれと杜あめの何ワをれ花もなく
勝るすぬ色よを程もよらハ
ひらき梅よ菊よふハ書林の子代を
きうへ家うそ花あち物あく一室
をうよ大よみふれとも花一箇も四季
をこえくは梅く梅もよ

鬱延枕と盧生夢 蝶舞机辺 莊子魂
あつる花やりぬることの夢もいづれき
折うへ梅木の干當事うへ者あつる
時鳥の一種は梅を乞

巻のなれと梅あめの何ワをれ花もなく

たうちまわいつけわたさず病中の予より
白濁りたのくはのあさくはよの哉も
そよふふうく門人の徳を郵一あふ
あやとくささく感くもあやのあり
くさ事よせん一日

二条おとより片健初の日かよ病床
を下りくあつき 作ををあくこま
まり道の業ある変をありくこり
給へあまも言ぬ明れハ昔傷の光
きさくくつりき一天中こふまらひ
給ふよらの朝より大人誠意ちんく

水うらひをくさすかきく芦雁の
乞ふとく文屋の表書をよのあふ
そら書も名考よかきくのみゆく
いと物とくくれんらよま書屋の舎始
たすよ百池名をとら

この書朝ハひときくことかたり
ゆくゆき民の暮らうちをよま言の
あやあはれもよはくあふもさきく
あましくくさく二のゆくけき
おむむをくさの

皇朝くさくくく

玉簾よききりしをばくせんさあうと

十二日例の詠へる春のし集るもくく時枕を
あけ

梅鉢よ春のほころや唐草

あふ白を葉しほころりくくのほゆ
あふ介抱よきて日あはれ金使す
いらいや世のまかあよゆき
よきは清の俳諧をんといひて
あしたもまことの夕もよこけりわが
さるすり十九日え草山南の雲庵の
文基をく免をれハかりと告ぐる

たち出んとすふふ命も帰る程と
枕をこけ沸く糸物一途を帰る見
くちよき出ぬを秋田文の程ふや
あふむむあふの戸をあきりまたく
能く見ふあふの僕のあふ助なり
大人の病危篤なりといひまをり
あふまふふとをき能くハゆき
ちよめ良冲芦涯湖美其成等
あふまふふとをき能くハゆき
あはいうふと師の身をつくすり
梅鉢あふたりたりと高きよ告ぐれハ

廣く唇うき記ふこころまたる女眼より
涙をしくと薄らぎみくし紙け世は
名跡ありし御面の阿しはえうら
言はれぬもさしゆきいさうかさも悲し
さもいそんうらなくたくのむらも勝を
やうり割いあまの天なりあうきいあう
相府よりたくあふふいひやうちうらなき
明言ふいしり廣歎ゆくのひく色は
きしりききのうらめの四口 雲極四葉結
南大雲桂舎よ華送乃式を執りひ
ちの追福りねもこれもおやししき

追福りねもこれもおやししき

うきりを福もくうまいとをまはく目を
かき入目を隔て今いむしりあはれを
つとふ葉裁不朽の恨をまは事よハ
成ぬ嗚呼吾翁の後を沙りりて
其時秋葉よしとてま人を回しう付
惜むしりあまよしとて毒を極りぬら事
成りまはあししり座右の湯葉よ
ゆりしりあまよしとて毒を極りぬら事
かき入目を隔て今いむしりあはれを
つとふ葉裁不朽の恨をまは事よハ
成ぬ嗚呼吾翁の後を沙りりて
其時秋葉よしとてま人を回しう付
惜むしりあまよしとて毒を極りぬら事
成りまはあししり座右の湯葉よ
ゆりしりあまよしとて毒を極りぬら事
かき入目を隔て今いむしりあはれを
つとふ葉裁不朽の恨をまは事よハ
成ぬ嗚呼吾翁の後を沙りりて
其時秋葉よしとてま人を回しう付
惜むしりあまよしとて毒を極りぬら事
成りまはあししり座右の湯葉よ
ゆりしりあまよしとて毒を極りぬら事

追慕保長の俊ゆきし師う後馬の天概を

万こころをなくかひけ

〆

乃木 忠

寛政四年三月

〆

曲江亭桃睡涇血書

〆

追悼
俳諧之百韻

新あゝいもせしは草一 脛月
たはあゝなかり岩の雪解
小貝ふむまの洲邊よ約とて
ゆら心掛弦を引むをいぬ
長くと鞭をう地をうち出
やうやう火とをる氣多すしき
あもとのしり松葉はくも草
ませまゝそのかゝるを急い

桃睡

百池

蘭更

嵐月

湖羹

一峯

芦涯

其成

鳥の垂ををのつくと風の吹はじ
 明日の夢ををを黄ふゆめ未
 香る宿ハ新河船のよき名
 水をあふふる鳥のたををを
 山くく山の名のく免鳴渡り
 本音の鐘橋元とあををを
 凍れしはれは味方やたり
 新酒ひくまをを後時をを
 日わくく月の光りよ極りり
 空をををををををををを
 たよりろやひくくく國をを

佳棠
 朱玄
 葛巾
 慈周
 五雲
 雷夫
 如瑟
 子直
 紫曉
 東湖
 月峯

手くむ佛のやまになりハあ
 花ちりく橋のやまのまをを
 直宿下りのくくあけけり
 大凡中のくをりよ眠りまを
 雨れくくくまのま 並

蓬洲
 不木
 士卯
 不朽
 五周

右一頰下畧

追悼

前書をのく略

舟くくくくく付たをり本の梅
 かく系ふりくくををををの元
 嵐月
 湖羹

身は深き水に新も七尺の秋月
帰る人なきこと事ある正もあは
あけひはり此意をまよはしつゝ
おのれもまよきのおそなる且く

朱玄
一峯
其成
百池

初七日

おれらの事なり師の病中
口のめりくもめられ算のうき
氷初降乃に氷をなへ作り
しうくふはともくをき関伽水
をなるとて

桃睡

氷とけくあ汲くううううう
鶴よかききききききき
鳴るのつとよ新や能ひえ
相恋賦に記すの 一付
いあふり月乃名示ありや
家こよよ海の雛まつりり

岩月
湖羹
芦涯
朱玄
其成

右一頰下略以下効之

二七日

梅うま
とくくまらるるし力をきき春

芦涯

桃睡

ほろくくと連き日影も暮るる
月あふみのの瀬をいつくし
雄の風程むとあるこのく下
破よりけるまの

三七日

津海船とまきほらまきし似巻か
沙汰腫のりけむうふ月
大勢乃人よりまきの色もて
巻帆くし帆は船ハ出てし
巢のまの巻をえりし伸き
日のあふつけいふ家かくし

嵐月

湖羹

一峯

其成

百池

湖羹

桃睡

芦涯

嵐月

朱玄

四七日

情とねもひはく星日の春の夕
御ををやうつ 晴
たまり水小浪七果は打寄て
百間をくり懐ひきまきへ
みくし巻の月明くる家人の影
聚いなく窓の

五七日

情くもえりも化なりす巻を履
とくもはくはくの家 舟
解たるすりまきほら手

嵐月

一峯

湖羹

桃睡

芦涯

百池

湖羹

芦涯

嵐月

南うけを家ゆりあり
芙蓉各けくかつり月の色より
ちつ魚海ををちらりみる

六七日 苗書略

共越
白眉

け糸の重き糸は糸よき落もろ分
とくとまいたるにききるるそ
け終長村の多き地むん
風をよくきつる家とて火
旅ころ馬ま川を渡り眠り
一重一重の酒のほろ 碎
よみ人のちきぬ風物と月夜

一峯
玄成
桃睡
羅城
桃睡
青阿
一峯
幽明
玄兔

とくとまいたるにききるるそ

七 日 詞書略

薩州
完而

其成

梅ちりくくくやき旅の月日は
まを木のくくくまの海
うまをくくく緞被まきく寝
裏子の地の橋はひげこり
西風の歌よよまよ通
乾鮭五百ちる夕 月
先追のさねは西の霧拂ひ
うき世ゆきくく秋は来まろ

枕睡
喜阿
立蘇
規風
土卯
芦涯
其成

追悼をのく 詞書略

ちりくくや解ぬよ結ふまの夏
春あちりて白ひるりや墳の花
なうれりくくくくくくくくくく
神さしむる影も白ふ梅の風
儂をさもふ春月をたちあつ月
散梅の花 嘯む物との思ひは
梅ちりくくくくくくくくくく

紫暁

桃之

佳棠

如瑟

定雅

車蓋

月峯

あうあを疎くくくくくくくく
頂立や傍又空き沙曇り

宇治 麟路

黒 毛條

光あわれきくくくくくくくく
春の風 物多し似たるわくた
日向せくくくくくくくくくく

青阿

土卵

長 晋鷺

情むまのほとふつくとぬり
まりや終百日の夏志き
窓くくくくくくくくくく
花解くくくくくくくくくく
喚聲又日言なりひややくく

不朽

白黛

駒丹

雷夫

眉山

時久くや蓮催才水 一寸

城 下方

花ちりもく心むをきし日和く
ちき魂乃梅は曇る雪の月
影志けく氷く留れ春の水
この物志志を思ふななりは

越桃浴

松雨

麻栢

宋魚

象手向百花胡蝶は舞す

寫 駟上

諧書略

花も中し空なき世のあはれ
言信を今きく丁のワれ
笑ハ粒絲えよをき温樂ハ

撰

五屑

如鏡

花樵

中くは空なくかれき初 便

梅舎

晴のうつろやとよよ春の雲

五嶺

伴やい川流しはちきしうを柳

洗洲

春もその伴をくく春一の松

梧菴

つれともきゆるたもひを春の雪

五粟

つるもくも梅のそと白ふ草の秋

五州

け屋の志のそゆや春の草

脱負

かや原なき氷も解てそよの水

篇 柏由

るもそや梅は消る雪の人

石蘭

くさくさ梅はくけなき白ひか

良友

と京の喜よ免とけりあらし

可能

予もたもきよいつきよふして

新うらふる身ともあふるに坊

世ハ

ともうくもねるゝ身見む其の月

玄免

四月廿九日

百箇日 於大雲精舎興行

俳諧之百韻

廣明

新志ふ志るゝの松子喜ぶし

月の月うつる多路の夜子

桃睡

賭的の対わけの一色えけむえ

不木

ふとときよき人をうりあり

百池

岨里ハみれ山水よ作なれ

芦涯

やうの名跡め女所くれふる

湖美

わくもなく歩り出さる目と面

嵐月

烏帽子をひきまよとむりたて

佳棠

わきをまよつ十寸極の芒履替

白眉

白ひすくきむさめのおと

一峯

とちくと大仏殿の人の言

眉山

一目くよ盡る 世の中

幽明

形程ひある東の採ひをつく

白黛

百里あきくも啼くうりか

雷夫

非分の川海あり雲の流るる
ぬき出のそねは勝るもりり
渾うけく片倉よのく大つら
まをちをかぬきむ縁のつぎく
何神う宮もあそ病もせ若果を
つてちのすも雷のむきき
咲ぬるの花の香を擔ひつぎ
今谷園此を傳はよみよき
渺くと水まうて山高く
る市をくわとの字外
門とよ喜日詰を觸るり

定雅
東湖
月峯
朱玄
驢丹
笠安
蘭更
古塘
春翠
其成
蓬洲

本これくくは跡る星
臘八はあともまはさめぬ
とつくと男
志のい縁の社よ芥のうちうり
ををいとけたり
紫系陽花の如

土卵
青阿
不朽
羅城
少如

右一頌下略

我友龍門のわろし時を得るは雲とよ
金鱗をかやうし活中よ溜る
ひとく世をまらふはむは元龍の悔も
わろさるるあまいうふしてりむ
いしめふ事歳をかきし
靈丹志家

おたふし喜ぶ雲のむらみきととも
世をあらきゆらハ情むへきれをかげ
しきなりうかきりあるをうひ終は
書とくれ喜もなうん百十目の忌よ
わくりつ大雲精舎の簷端の風
ふきかけりゆらゝ庭前の山方は
たもひわをさく

うつりゆくりよこららよ

蘇子のこと

蘭更

わり師着雨巷の河叟出氷のけりめ
此律は逍遙しそ石山の月れ長閑きを
わかんし三井れ秋風は詠癖のいさを
覚し一筆を身をしるぬき玉藻
魂をさやけ心吞慎は周して師
作むるを乞ふ叟ゆりて予は一啖
をわらふ幣幣とて得る事有よ
似たりされとも毎月洋濠の郷音を
免さばそのち幻位菴は社を結ひ
席をすうけく御き芥斤を乞ふ
叟とてやうな事うらゝ蕉翁の結燈を

かけ菫の寫吟塚の浮の一卷を綴そ
志免はこれのく袖く風雅の書よあふ
叟もくと東武奥羽よ心うつふく門人
階央よ属し玄とと之存よしそ天明
水鬼乃三月毎ひ事りて義仲寺に
法席をゆうけ之井何某乃悟正を
信し法義懺法を終し且幻住庵よ
俳詠を唱て

蕉翁納百回乃遠忌を引とて裡れしも
命救のかきりを志すれくくあや正月
廿日桃睡苑翅の書をわこくそいふ

此曉阿叟美容大兼法其蓋よ味し
終ふまといけり識しやふも何し
忙哉とて洋舟よ楫しをををき
閑書亦舟を舟ふととみよ友う知を
くくくひ龍門よ事あは以下ハ鐵の
亡骸を扱しし傳よ蹉跎寸扱しも
よ之きしとそくぬハ多ひ然傷を
よく免合くありもありの名をを
朝よむめき星家よ向ふをより所あり
盟約の始より此列ありん事ハ以り
有りともくも法後破よ所し

孝の命毛も終をんをりりは御吐く
さるるさるる 齒の根もあをにけれ 駿道

正月廿六日於幻住菴終り

追悼之俳諧

駿道

春の春の春も覚は一七日

漁更

あつきささきさの神よりけふ

于當

呼吸者もの准へてさあすん

規風

波風つる舟の中 みる

蘭芦

南と北もいのおまはるる月

とちあいの林あつりなり

慈周

春命矢刻る花の帯あつき

五英

みをぬふりする外骨の痛

百萌

やうく判みとりの髪を梳り

二薑

やうくまきさぬ 沓のふきやり

馬涯

鳴神のあと日のはと 蠅の中

艸芥

わりつけ 罌のいをに 桂木を

吳罪

骨接うともなけ 髪を梳るとハ

蕪化

糸おられたら 糸敷のつて 場

糸二

とつて 子母ハ 膝のあはれを

吾今

おま 掃うめの 袴のとくをり

三蕪

ちれと香は今に希き梅の香

五英

悼

三深のひさびさきとちれ梅
物老のちるよとのゆりき日より
うくひすのちるきとちれ
古くゆやそとのちれみとちり
其風よそちのちれなりなり
花のゆきとちれ梅のちれ
ゆめこのちのちれ入るちや梅のちれ
月入るちのちれ梅のちれ
つとちれ世のちれ梅のちれ

葛巾 艸芥 呉罪 馬涯 樂二 桐五 于當 百崩 素考

ちりと梅のちれ梅のちれ

蘇律

月よ暮しとちれ梅の水の月

漁更

梅よ暮しとちれ梅の水の月

棠蕙

梅よ暮しとちれ梅の水の月

鯉一

梅よ暮しとちれ梅の水の月

恙周

梅よ暮しとちれ梅の水の月

烏孝

梅よ暮しとちれ梅の水の月

規風

を吊

ちりと梅のちれ梅のちれ

二薑

一代の風流は梅のちれ梅のちれ

暮雨巷のそ〜き名をの〜疎〜うむ
閑よはへ胸はくられてさ比の交りひらく
心ひもろを悲〜きや中よも〜をの
昔の秋と起れ 幕下よ台紙く事ありて
少〜もよふきみぐ〜起よ色ひな〜り
た〜きりに神をつ〜極〜道 終
おもてを起さ〜き 鏡の眉い下も程保は
ひうふうとくあ家ハ右心〜と〜てハ
湖と妙月又列を悟〜わろ〜さうの〜
さみ再會を怪ひ〜も〜必ハ誰〜甚よ
う白ふら〜を月ハ誰う杖をう照さて

三三三三三

ら世か〜ハ何う〜えれう〜の朝臣の
慈を起しより〜らみ家人〜人
のうき〜あ〜は家を名是〜る言の
〜も〜う〜き〜は〜梅のひうも
庭〜き〜のうハ柳乃〜も〜の〜き
お〜ハ神人の小松も〜た〜物 ーハ
み留とのま〜の〜つ〜きむもゆ〜
や〜ハ難波のわ〜のう〜お〜病は
さ〜お〜されてお〜ひ〜た〜の〜
烟の末もお〜つ〜心迷ひ〜
能もせ〜秘もせぬ旅の〜の〜と〜小

くこの歌をとりあつて、櫻腸をたつと
いふはすこし知らぬわ

喜よなとやけ法をあらわむ

古鳥帽子

月居

一日の夜を交すむの十年は勝せり
と、伊豆の時より、底よとくすまひ
是より、新川の主人、去来、そのけめ
つり、その草舎の隣、よと居、り
夢、かゝる、まゝ、り、好、ふ、その、字、色
を、む、ハ、胡、文、と、あ、ら、ひ、あ、え、は、く

師父のこゝろ、親しく、語り、な、あ、は
は、世、を、ゆ、り、あ、ひ、ぬ、され、ハ、志、の、や、ま
遥、を、ら、ら、井、邊、の、秋、城、は、え、ん、と
光、を、と、く、三、井、邊、田、の、秋、城、は、え、ん、と
風、鈴、の、と、ま、り、も、あ、め、る、そ、ろ、ち、も
く、つ、を、ま、く、七、日、く、の、は、ま、あ、は、の
世、の、心、ま、い、と、な、る、佛、徳、の、教、を、親、愛、せ、ゆ、ら
ま、な、ま、と、も、あ、ら、ひ、集、え、つ、て、世、に、こ、の
ゆ、ふ、を、り、り、あ、ら、ひ、一、冊、を、と、す、り
ま、な、ま、と、世、に、愛、魂、を、送、り、と、す、り

あしり

法下

まろお家巻

芦雁記

三三三三三三

二月廿日

初月忌控古渡洞仙寺

法會終り

子規を苑山の山流の香とくも時と
なくふり出さく啼くとよほそ人の心の
響きとくまじあやもゆるさく
はくもれ香のくきそのひて常も
まじ同をくまほれくもや物をも常
豊うせたすひぬあよそりきやかき
あふへくまもく世をもむく人のこハ

三三三三三三

多ハ海山の松とつら中子 忠骨をさうくはを
 若とくゆきやゆきを此申つて身を九事の
 秋のうちはよきりて孫の極とくゆきり
 これすもゆきをさうりみろは蕉翁の在り
 粟津の浄土はゆきりゆきひく文字去來の
 徳を善と善とさふ佛蓮は圍遠一
 たまゆきゆきあをれゆきけあもゆき
 くりあつれたゆきゆきをさうりゆき

俳諧之百韻

散うめいふか墨海の白ひや
 若のゆきゆきのまをさうき
 峯の雲里ある方は維多ゆき
 ちゆきき階子をまはゆるも
 次一きんの夜素をおゆき
 つゆきゆき秋の中一は
 雲霧のまを玉明月は浄けり
 たゆきを門もゆきゆきのま
 層ゆきゆき物書なると松のま

士朗

卧央

白圖

駿六

万徳

彪門

紀鳳

五周

昆明

こころをさる信く来乃そ
 心をハナハ書の本との意家
 おしもとまてし一八の花
 水鶏なくねの括ひ鳴ひ
 神泉苑のうここは西宮
 物をもの依りこもり法師も
 さひーきを念ふ念をまじり
 ぬを壁よねをの月のさり
 烟おくても時をーる小
 筆を筆を括ひくすよらに房杖
 ぐふも一日みぬ印判

少海 沙漠 羅城 素兄 素外 李谷 徐英 閻毛 岱青 圃曉 沂凡

花のてこ山内ハ人評されす
 ーら浪ちうく書風の吹
 せうくーと名をまよ入まよ入
 強をー事をーてハ麻精ふ
 其ひー女のわりま身をまて
 かつまてくはまかまむらむ
 棒一弓岡の名舟のまゝの歌り
 今つまていたまてりー南胡
 織の及まここー物に何やむ
 花とーとまりま葉の花の散
 詠ままりも何とハ者そのや

岳路 怡泉 吳井 南陽 臣川 寸長 雨曉 凡鳥 閑里 扇里 桃年

けうくくと出く返るをいふなり
 雲より鳥返るなり川向に
 亦權に疎る 大樹也乃岸
 名を一のふ東玉武士の神の露
 をとりののふりのかういひみよ
 快きおを吹ゆく 神也
 湖うけく句ふ 稻の 香
 和くをげくめくき物多
 常刀との 痺 雲くす
 鏡戸の明きを言く夕日言
 誰うかをなく 山なりきん
 一風

狀哉

鳥雲

垂満

棠水

也梁

看古

桂五

共合

星阜

大年

一風

霧も初く出れく世たるの御
 更う初く友のやうハ志はく
 片破の月裏物つき雲の中
 今朝の雨ををく 柳ふ
 初く草やゆらゆら天は澄む
 井たけく曲く橋つらる也
 面白きやを伝う秋の庭の花
 雨の音をきく 雲文に
 春くれぬ竹くすてく 雲み
 毛けく 雲ひく 雲をほひきり
 毛くくく 雲くく 雲くく 雲くく

茂竜

斗三

大阜

并二

發鬼

満子

帯梅

魯雄

庭甫

五寅

縮城

若狭小細の塩出しをすまひ
しつゝ雲のわくる目程雲蒼く
田舎鶴をきいた歌をうたへり
送りしそよ阿闍梨をえまひ
身をうらぬハ一のく方をき
花ぐりのをかく落し風の留
ふくらの鹿の草を擗出に
此寺は扉とつふはなりりり
脚氣つて何る乞食の僧
いろくの泣程よせよ月と雪
あな名師とちりり 鳴り

雨滴
士朗
卧央
白園
彪門
万岱
善涉
昆明
少如
素兄

松風のよみ平も迫られハ
襟のよもれを濯くおろく
只人とちりり火も焚御もとり
嘆おそき粟乃木の下
猿の子の中くよありをそそ
すこけ舟を乗を呼よと集り
筆の垂の水即ちくは流る
恨つゝ乃月のうらみとそ
けをなすも車破れあき
塘をなすも水の新の音 低
夏をなすも海はあはれ

花城
孝谷
素外
間毛
徐英
圃曉
岱青
岳輅
南陽
雨曉
舟長

名のよき免りある物をとて事
わりとて起ゆつて咳出は西東
やまとの燦の如くつねに
ふらふらのふらふら見えし成累て
あふしをまこ金事を引ちる
むさくゆと暮ま泊たる舟の蠟
舟羽ハ涼き浜をりりり
昼根暮し宵ハ嬌きまきり
外のちうちうはらつきを雲
好きし紀事そそむる松松
風は涼しつ涼山への池

山望

九鳥

扇里

也梁

鳥雪

斗之

茂竜

古常

大阜

魯雄

護兜

まんふりと古き小社を引ちり
何とてひくくふもみちる
白榛乃乃の肉す々這のひて
之根の秋まか秋鳥の節
稲は下の稲は出くくる之の月
今を所りりせ米を荊に
金槌むは草へち号を賣聖
柴焚々ふりけ木の戸のみみ也
歎冬乃枝ハ淋しき雨蛙
これハあるる岩の三葉
此ありけりたりたる人ハ誰

栢城

帯梅

逸少

五寅

雨滴

庭甫

士朗

沂風

大阜

彪門

長林

何またとむ風のりめろす
花鳥乃老も昔ハ萬景を
南字もふ柳海とらなり
羅城 盛青

衣(身)乃沙を教ますふのかりを師の病
床よかしはき居たりと病のひふ
ある日その教乃とめくし来た事点も
卵やい示し強りて後きそんころハ
吾た方好強いむまひ留より汝玉子
強れとう室ひなる強まを強のせ
強たよりを強り強まを強り

月の始のころハ羨うつ言(は)
かこくそわよく懐いとそ
いひあまねしつても人も懐い
阿ら中よそ月の女二日呼の
余下強を告事り強歩返一なる
悲しよは強きしく胸せまりて
忽強(強)の時と強(強)来よ強

沙音のあらやと

ふきる強が

臥史

檢香

夏廿日蝶多きも静也
おもしろ極の事いねまの草が
鳴鳥の音のむ法の花むら
まの目もかくまうりま恨ふ
草一世界いんち響り小山様
涅槃舎まなまこころまたたき
蝶鳥もかそ地まふは法が
なまき法の名ハ程き一揚ひり
確りけく今ハ洪き押とぬ
暮歳夜侍のこに廿日月

万仞 羅城 岡毛 岱青 岳輅 少如 五周 烏雪 松人 沙漠

此みちのけりふきてそのあ
りくくきくあまぬまのま
あそいそ世を隔りまのま
なまたそはまのまぬまのま
山ハ草ま多まこみぬや
ま柳まあひまき月のま目
陽まやま高りくもまきわら
梅りまは泪濯勢わされまな
物まひぬまハてまぬまのま
師の病中一うきまのまの
まを唱まも物まぬま

魯雄 徐弟 満子 逸少 茂竜 稻城 昆明 計之 吉甫

世ま春のそく大本振りと安目より
うんたおとく物とぬまとぬま

秋磨
朶乙

嗚呼り好く師と家と幸此の
むつひや難と信と師の室ふこと平も
西曲とひ平のふこと師も
うをりりこ二人とのよくあまりの
師の身まより好ひて由耳よまきく
と我失ひ口よのむむををり
な思ひのほは思ふやまきりてわ

垂満

かけろふの勝よあけり香部山
松ととたふふふふふふふふ

桂五
星阜

つら桂花楊の字名を移り行ひて
部と字名がうつと行きて
とる一程を移りて家ら今け
くみと感ぬ

も向てもや室家うつと室より
款はくするより厚も切なり
嗚呼りとくく桂の松を
歩ぬ人は庭の園も

看古
庭甫
物裁
桂二

阿叟をよほく嵐山を賞し

あゝ

をよほしひは花を遊むむわし山
さるるり人懐かふはぬらむま
ちまはくそまはゆりそりむそ木

初七日

枇杷園無り

士朗

梅柳又てもくやきやあつひ

白園

くまはまきとふまの

盛青

梅柄と唐り方よ押ひけて

閩毛

蒲園のみくを又ぬりたり

羅城

あふしと林の風吹朝の月

卧央

草堂のむくを咄言つらん

右一頓下略 以下同之

同日 朶凌舎無り

紀鳳

そくれとひひ悟とひひまの雪

彪門

ゆあへあしたのをこころひひと

沙漠

あは梅のちらと向ふ神のうま

昆明

あふりとあふりまよしと月

少如

柿つむ秋とをりそり暮下

二十七日 桂葉下無り

白園

月もあをくくくくくくくくく

風の吹くは春の上は編
頬白の雪は下は編
琵琶の糸の端の端は
空を丹塗る水の
空の春の野は

同日 薩園集

月夜歌 歌の歌の
懐 懐の懐の懐
海の日 海の日
秋の 秋の

御青 士朗 素外 閨毛 臥央 稚五

敷六 満子 岳路 少如

家への心は離れ
火の心は

度甫 羅城

二七日 銀後古也

心の本の芽は
この心は
蠶の心は
隣への心は
月夜歌の心は
二、心は

素外 少如 臥央 素兄 雨滴 昌川 白園

四七日 寂靜庵無事

羅城

何登もぬあふまの月影は

白隠

樹もろくあはちりくちきとを

宮毛

きのふあふ燕古巢は魚出で

岳格

汐止も海へ名の

盛青

旅人をむらへ入る家まひり

万岱

夕やけはまろく淋しくせ

同日 素兄亭無事

竹の影をより又版指をうりて

日々くはくはかかたけきこひぬ

飯卓魚よりくはくはぬ橋の奥

素兄

ゆきハ淡言夢もすきとそ

五周

角落一麻の額を控やりて

駈六

をの黄くく云有くひや

素外

三日月の夕をくき古き

卧央

同日 春日居無事

ちりくちやまの春のそ

剋明

柳の影れをを白

沙漠

際名のうけ返わりく

紀風

船ハ山のうちよく

吉甫

雲物もすく

士朗

飯のあやたの

昆明

五七日 一勾井無り

あこりより見せは蓋なり其の月
と名せんくぐちやあわしのふ
美能は滝のしら玉粒をひそ
車に通るまらばらりす家
草袴腰ハふこは押まうり
代衣入りぬりこめのこ

桂五

臥央

白園

岱青

桂裏

言毛

同日 鳴巢 無り

あちりく風よ心のあけなうち
さひーさゆる其の夕ぐれ
三日月の月子睡をおくゆて

徐英

士朗

亞滿

人よらきと年ゆるちり

羅城

あきも心あしと風ふ任の表

万岱

幾間越へるあるわうきれ筆

少如

六七日 岱青亭無り

俳諧乃乃泣のむろや雪月花

岱青

化佛困遶のうくを能はの奇

野城

喜のあ水よし喜をさうげん

桂五

氣をねますふ人をみよ出る

岳務

すらくとさかりのちも悪小社

少如

牛の歩の夕ぐれ

士朗

同日 十字庵 其り

圃曉

名前のさしやうも世はなき
素のくさみふきのまわ
戸出をぬくまを回すのあと
はくね衣の神のちひさき
三日月の端より起る秋の雲
袖くほをく敷舟のすらく
敷河をくかけはまゆとき
津川
晩鐘のくねまゆもなき
風をきき風のまゆかき

巨川 五周 閑里 寸長 雨曉 凡鳥 素外 卧央

あつらひは海まきくまの嵐の雲
之羽たをらあくる名前の夕ま

扇里 桃平

七々日 五周亭 其り

師とともはまろ狭の小傍よ

旅泊をくくもむもい出く

五周

小海子 魏りよふくまの雲
名をなき奥の月と花の雨
枝をきき春の葉を摘んで
日々ねらくも戸をさぐぬや
名月のまゆを懐くまのま
萩月け衣をくくかゆねる

白図 卧央 士明 物裁 素外


~~~~~白の如く吹さらす秋の風

庭南

百箇日 暮雨蒼苔共り

白濁

後をききたるり今朝の詠ら

岱青

百日をもちし一弁の花の 陰

臥央

下枝をもちし秋を離りぬ

大阜

人さゆくのうつを貝 賣

間毛

春乃月ねぬえうう懸掛

岳輅

けふ蘇の二葉の葉あわさる

士朗

はるしくと雀の宿のゆきぬ

徐英

衣のやぶさしはる 怪一さ

昆明

障の音のうけりよ響く雨の音

十二詠なうはこえは

沙漠

馬は附り酒樽を引寄

李谷

急折たゆる人のまなり

素外

晴く家女日下りの杖の月

五周

雲のうらをめくる水音

大年

焚つけもはむつりき葉練

紀風

後の子は泣きをいそぐる

万葉

まきまきの花お井は咲か

桂五

すきまを雲よ丁の地也

物裁



四十と世の昔ハ反喬舎子舎一みとをり  
 きのふハ夜信亭子何そふ近くハ晴の  
 名の秀々々多雨ハ名跡をゆくむぬハ  
 六十一字予ハ古稀又とわらわおまじりや  
 ハと世の數短々々今や花の散下トハ  
 いまおまひつげむ旧知己をいそ思ふよ  
 老の吾儂おまじりきなき誠観一より  
 こゝろきこう又起りて字をよめ歌集  
 ありけり  
 名をいへハ睦月もわらわの歌  
 逸筆坊

名をいへ何と西京の鬼と  
 名をいへ我徒を失ふ  
 こゝろ天を各ありより野鳴を  
 予は東流こゝろわらわの

吹送れ

友雀ハ分巢ハ存ねハ心  
 雲の舞ハ舞ハ舞ハ舞ハ舞  
 雲の花ハ舞ハ舞ハ舞ハ舞  
 雲のよハ名をいへハ舞ハ舞  
 雲のよハ名をいへハ舞ハ舞

知多社十

墨山  
 水雲  
 大魚  
 士峯  
 冬和  
 玉席



月入る夕まよし梅の白ひは  
黙鳥 英士

まよふ心は紅子梅のしつこくか  
弁二

梅ちりりく露の咽まあり百子音の  
同ふ事きく事ハいつと

おろるやま月おとありはと  
なりり今ハと  
大阜

わはまきと雪の序言うか  
去冬の林いひはひ舟を  
う久く願免とあらせ

おれん

まの海昔情の目をしつこく  
梅ちりりく露の咽まあり百子音の  
おろるやま月おとありはと  
なりり今ハと  
わはまきと雪の序言うか  
去冬の林いひはひ舟を  
う久く願免とあらせ  
おれん  
帯梅 聰吳 發兔 北橋 兆如 也梁 台沖 芳酬 渡鵲 葭涼 以息



花ちりそ鳥啼きと成まかり  
 梅散る梢は雪は白ひくれ  
 花の吹風情を去くよ胡蝶  
 下高く深き雪の名紗外  
 ちり際ハ河の蒼となき梅外  
 花のこころは木笠をりふひは  
 植ゑる梅のうけの影りか  
 左りぬきて世のそよ雪の雪  
 情やれそちりや一樹の梅の  
 月西に入ると東南の人の眼を  
 梅さぬ香もなき雪と女は

如泉 魯朝 井水 壺仙 里友 仙凡 竜澗 吾春 千久有 且有

新まけの雪の心あるき

木人

如那きとて二月の月夜外  
 雪の雪情やとやたそは月  
 梅散る梢は雪の影りか  
 月も花も雪は消るねとひは  
 星も花も月もなき雪の影りか  
 月入る梅も白ひは向うか  
 雪の影りか雪の影りか  
 淡雪の影りか雪の影りか  
 うらひも雪の影りか雪の影りか

佐屋社中 仙見 之祝 梅具 梅共 巴江 安之 米汁 風止 善百鬼



香菊よけりし梅もも白く  
春の月散り花のあけりし  
人さへもあつた面のむらり

竹新田  
等先  
青霞  
啓甫

宗道物故の御齒社中ハ觸穢の悔もて哀嘆の  
句をも梅を本意なくさし傳るゝ二草競ひをて  
此卯月百ヶ日は成されハ今ももて已く退慕乃  
名ひをのへ灵魂よりたけりぬ

社中  
木吾  
梅虎  
仙布

たより強く百日たをぬる梅子  
ほくまは國々よとて百ヶ日  
鄭三なくははるるも西のく

たくれ世を蚊の痕よあのみ  
古人志すは風塵の百合は苔の面  
花をり世をあふりゆくの変

笹室  
兔石  
亀六

いり年の冬曉甚き急師よをてしや  
手病よ臥々終ら良業終わりて起  
旧のこゝく成ぬる懐ひをりさ海りく  
春立知れよ言て暮をのへ素里よあふ  
や〜〜〜はうけくむ〜〜を辞  
ゆり〜〜〜短冊の巻もかま〜ぬ  
旅よあや〜〜三屏〜〜人々の洛陽の











吟食もくもくきむ那智の傍原  
字即く接連ハ槐をいふなり  
白ふ秋のささるる  
露もささるる子平の藤子新をささ  
るる接連もくもくささるる神をさ  
す  
此一圃の方とささるる子平を連り  
子平接連ハささるるささるる  
夕子ささるるささるる波のささるる  
西ハ小降と接連もくもくささるる  
ささるるハ楠湯のささるる接連もくもく  
月の在園ハささるるささるる

六甲  
風射  
巾大  
雷后  
局明  
杜嵐  
北固  
猿眉  
管外  
曾外  
伴序

實方のねくりハ花のわたり  
接連もくもく鐘のささるるささるる  
一里の八日ハささるる接連もくもく  
ささるるハのささるるささるる  
ささるるハのささるるささるる  
右百頁 一頃下略

南平  
岡毛  
完小  
雀鴨  
執肆  
月社  
万寸  
渭原  
凡射  
北風  
分字











跋

泃淚慟哭農句古禮を安泃  
免と落梅をといふ蓋落梅を  
其時を亦宗一也也 吾鄙  
言信能尔ほひ何ら美 其  
あつれりや

羅珠記

寛政五年夏五月

門人 卜央 揖

俳諧の正風を口々尾張の玉は吹起りて  
冬の日は不秋仙茶ぬそけかき芭蕉翁  
徒ら〜たる他人わきさ〜哀尔おほえぬ  
とて身を本〜〜尔風程〜て都一鄙  
をり〜の吹り〜尔冬〜あ〜に〜又〜  
たまへり甚〜ろ弊田小指てゆひ〜  
袂路の丈に破れたるをき色志のふん然  
す〜尔生ひ〜ある中〜尔老〜交〜りも  
心〜すり〜るや〜さ〜せらるかそ〜  
磨雪は積不送言を〜ろ〜ひ〜お〜唱と



人のこゝろや依屋の御承飯兼せしむる哉  
海色の贈物たる白く子鳥の鳴り星砂の  
やまふ心をよきとて 笠をきく ころころ  
もきをきり ころころ 月もはやとせり  
代々小田新水とてり又親き人のなりとて  
粟稗のたぐふ子鳥菴を尋ね入刈田の  
鴨子雀巣をたぐふ子鳥 帰るや子  
夕言ふハありさあるたとふも似て古  
月をあらわし 夢すくらたも付ぬる  
春をうきむ 或日書 林風月堂子  
鳥もやさしく 見えく 志門 立よりて

休らふ不世は雪もあふり出 一巻ハ

いさ出ん雪見ふころふ新水とて

丁卯臘月よりめ文道何来よ送らせ

鳥一玉るをうこくをよき

三嘆ハ風月堂孫柳う秘夢なり

いさくらハを再業なり

其白紙古きをよむいよせハを家の文書も  
又めくたし 不肖士朗百季のそと 三巻を  
とふらひとてんとくの白く脇つけるハ  
あつた言書豊よりくをくう書三半紙と  
あつたりて 其書半紙とてのひぬりて



何の幸ひを云 吾々の事云を云さしや  
中 師も今ハ音く有り 玉ひぬらふわを  
風月雲中 小席を寝たり人くを舎ハ  
少も尔為の美 淡み終極 一とありふさ  
まきの後を改く

麻刈集

雪之卷

いしららハ雪足小ころふ不すて  
百逢しむきまののすら  
塩むら小纏いらら皆裂らん  
又さし出たそ新の燃えさ  
山吹のあをを入りりみく  
蒼子良そくえらるるり  
桶の底かくりとぬたて其のあ  
何うもきこぬり日す降りり  
徒負し伊賀の石切本逃す

士朗

暁臺

朗

臺

朗

臺

朗

臺



是者ハトて死田を破る  
 孰恙能乎井もろくふ下居  
 々ふも焼坊能多言  
 ひあくと休あも月代ホ  
 貝壳櫃ふけりる阿き風  
 去後志もや業ふきちん氣  
 本質の温泉に福り別  
 刀賣る人尔出向ふ花のけ  
 破也泥障を師矣又發  
 妻のそ一財貯るの種あり  
 ぞしたそまき戸ひく指百と

朗 臺 朗 臺 朗 臺 朗 臺 朗 臺

沙船人曉くくさふまわらん  
 梅まきくくく門阿海々酒  
 烟そふて折流くく知ふり  
 垣より出る水のちりり  
 光はは梅を玉りとまふとりそ  
 承之下向のちりき朝明  
 父を松母を梅と有りめそ中  
 浮世の多量多風の送り火  
 言る夜の月を流すり上る也  
 福す勢玉へ居能言る石  
 統て子民家もなきおある

朗 臺 萬岱 羅城 岳輅 閻毛 岱青 蘭水 卧央 彪門 紀鳳



同の盲るすて歌く日本祀  
終能喜能天の戸海山うら  
まをふすぬ人せてハヤ  
本のりふけも鶴もさくくハ  
蛇の鳴日多今も長深心

朗 城 青 島 拜 吟 白 圖

雪のりーえき降りく日

枇杷園ふる砂ー一雪

雪もてる雲の鹿元ちうう雪  
梅一葉初雪すてハまたハヤリ

多 曉 帶 梅 臺

那の院古を花めくりむつるユ  
人々のあはれハいまここつる一ツ

月もた〜す石くけやりあ〜

枯〜葉もひらり葉〜こり

初雪の那ふらまを板戸哉 士朗

菘室

枝炭小見中ハいらの落雪お  
落雪やき〜白菊能あ〜り〜  
白雪をわら〜のふをハ東山  
冬鳴〜葉〜り松の雪落雪  
け〜〜せをふもな〜雪の山

菘 盛 室 梅 吳 聊 于 杜 常 琴 波



赤良坂千麻の尾小見るくさの香  
衣を着は濃紫よけはれを  
ぬくくささ香小麻色寸葉を

青峯

岱青

間毛

書懐

月小老のつもりのいよ〜く〜の香  
降りる香花をのふは〜ぬ〜きさ  
人のり方〜り〜る 風の香

白圖  
文陵

騏六

兩尾山よさる

老松の香〜ら〜る〜る〜  
は〜〜と香のふる〜  
深くやしきの葉ふをれぬき

多木人

徳六  
自徳

三木  
木吾

呼後松嶋の里をさる

香あゆめ登の香〜る〜る〜  
萩の香〜満ちき〜る〜る〜  
香のや〜よ〜き〜ら〜や〜月〜に〜あり〜の〜ま〜に  
香の日やんほ〜き〜る〜ま〜き〜ものもあ〜

野央

紀鳳

沙漠

羅城

風之巻

ふ〜〜〜  
風よ志〜つ〜る〜の〜よ〜れ  
砧うつ遠山〜る〜の〜年〜く〜ま〜て

白圖

士朗



魚依漕舟をうけてをり  
夷およ古き風情やのららん  
橋をとつぬ人としてハナ

徐英  
朗圖

登八事山

木くくくく佛の魚の志つくや  
あくくくく隣の前き日暮外  
風や身を木く山のさくくき  
くくくく山又山のくくくく  
木の鳴て木くくくく吾家外  
木くくくくくくくくくく

岳輅  
臥央  
吟幸  
古常  
啟甫  
驛道

風小海蟹鳴りく破戸外

五周

くくくくの吹つめて又の吹くた外

岱青

虎足菴のそのくき八岸高く橋を

土橋をワくくくくくくくくく

木くくくくくくくくくく

白圖

平系少て

木くくくくくく小町く死て幾世く

趙危

木くくくくく海一くくく出る

士朗

くくくくくくくくくく浮山く

入素

風や夕山名の鳴りくくく

卓池

くくくくくくくくくくくく

曉臺



木曾山中

序々や日も暮る〜 影りあがり  
木うら〜 後祭あも神のついでに  
こゝろあや尾のうへの月を〜

桂 五  
羅 城  
丹 戎

ふき雪のよき

星沙きのの雪と風とあ〜 日 月  
俯るの中は落る之  
小腕を挽す芝附のうへ  
人のと〜 こゝろおは應る  
〜 舟中賀うら〜 舟中賀うら

岳 輜  
士 朗  
吳 井  
輜

宝珠ぬねをかさる 橋 小舟

井

串は縁をうら〜 海をうら〜  
ゆきむらゝて

高浪やふき雪を〜 伊勢の海

万 岱  
卧 央

送茶

雪を〜 硯の海の水を木に  
加茂川や水〜 雪り小舟

間 毛  
采 芦 涯

醉起步溪月

月の覚て見まは寺も川 千雪  
か〜 月を〜 雪り

素外  
巨 川



いとよきちかきあまのふたふた

湖色

古きや福ふり島もな〜千も  
夕子音海をま〜ち〜め〜  
萩り〜りの沖小楫くふふ音外  
磯ちとり沖のふ音〜へかりり  
浪のふもむ〜り〜音ふ〜りり  
むき行へあ〜ふ又〜る〜りり  
云何小て

夕海前千に神孫を〜り〜るふ音  
夕嶺は上小松む〜り〜る音

桃膳

羅城

雨滴

素兄

木人

安之

風止

士朗

元更りて

夕雲松風のはら〜り〜る  
む〜り〜り風のむ〜り〜る  
鳴や〜ん〜のむ〜り〜り  
む〜り〜る〜る〜るのむ〜り〜る

曉臺

李臺

岳輜

岱音

鴨の巻

海音て鴨のま〜り〜る  
煙りて海のま〜り〜るの  
袴皮む〜る音のま〜り〜る

沙漠

曉臺



すゝある人小ぬくけりけり  
初秋の扇をまろくむ半簾  
老馬や〜白萩のうけ  
七葉の鉾のさひするまろく〜

漢全臺全

訪隠者

芦鴨のそく水かゝる鳥の子  
水色や汝住江流まろく〜  
夕月ふむくひて鴨の流けり  
水色を尻尾吹木こむ日枝り風  
水〜りのあふ〜む嵐うか  
鴨鳴〜けの〜

多墨山  
岱青  
嵐桂  
庭甫  
帶梅  
蛇至

うまうもや藝男小射尚さま  
ぬあ〜て泥かぬの浮寂を  
水〜りや小笠かくまの朝日  
〜〜〜やた〜〜〜く〜人の乳  
あき〜〜〜流〜〜〜  
か〜の子ふま〜海苔か〜  
辰すす〜ま〜不ふ〜  
夕川やのあ〜小鴨ふまの〜

暁臺  
青霞  
沙漠  
士朗  
岳輅  
昆明  
紀鳳  
白圖

冬枯の巻

信まゆ〜枯〜解〜舎〜か



雲の枝木の光る日ゆく朝  
雲をくくふき山人の亭を呼ぶ

蘭水  
曉臺

出柴門

冬かきや日の暮るくくとるの海  
ふ田うきききり川邊に木ぬか  
吹くふへ吹ききて枯るまきき

間毛

看古

白圖

新波入江小古きを尋ねて

采虎

岱青

ひきき草小浅る新をくく三日の月  
冬枯や何を足送る麻の耳

持扇一巻巻てもたて冬木立

京  
關更

冬かきや浅かきくくの夕々々

草  
仙児

冬天小河色の草のうききふか

曉臺

案杖くきふ居るやう新巻

全

枯草原頭有感

いろくのあらしをくくふ田はく

少如

冬ふの目も冬木の常や枯尾は初

現山  
三止

一ツ家の新小移たるは落葉ふ外

芝表

畑中小柿一巻新落葉ふか

士朗

冬枯の光



金屏子松の古さよ老こもり  
雀来て啼くさのあか  
呼ぶや細引の繩もふつん  
腐まじり杭流ふも崩れぬ  
蔭衣小いまづまわくる月ハ雲  
善もあつても拂ふ長刀  
杖悲し足さへ柱よ一そあり  
栴檀かきたるあわさりのたぬ  
花子かきし能く浦波をうす  
妙法花經を理むしときふ  
他の子の老ふ事をももきて

雀 青  
曉 臺  
蔭 青  
臺 青  
帶 梅  
大 阜  
青

尾張あびりより布とく淡鏡  
月此為小飯乃四阿々きとら  
わりとすてたるあの子り外  
笠籠り雀小初まの小候 名色  
そく眠たいも病なりとん  
花落るまな可かたむ  
ちるう小病のあうすむなり

阜 臺  
梅 青  
臺 青  
阜

幼佳菴小を結して

火桶抱えりかこ杯あらし小泉庵

野 央



世を蟬よすささこゆらんをよ  
 冬を誘う〜わい日夜の睡ゆ〜  
 む〜ろ戸せりあ〜りのをよ  
 萩ふん〜ゆもゆりをよ  
 二三日ハ二橋下志〜ゆをよ  
 冬あゆりす〜ゆあゆりふれやま  
 山の奥あゆも田一枚ふゆこ〜  
 は眞ぶ人をもす〜てやをこ〜  
 或人の油〜を〜ゆをよ

關歩

曉臺 岳輅 龜六 士朗 昆明 嵐月 羅城 免石 北橋 白圖

口か友側毛被伴て後落香川のあ  
 冬ゆ〜ゆ〜ゆて葉を煮〜ゆをよ

たの〜こがら

岱青

ふ月桂一竹の奥をりふゆをよ

旅、藤のまき  
 たひゆ〜石をゆ〜ゆの夕月夜  
 市のゆありのう〜埋〜す人  
 歩り〜人あゆつげり〜ゆゆ  
 ぬもよま葉の日に風情あり

昆明 曉臺 明



八月十四夜湖上を歩む

水をたぐりてふと志きりるり波の往  
来のたひひきの極もあきらめ月  
ワケ掃ハらふをうきりりおと子観  
一日おたひや世はゆり世の世  
春風におふたき砂のあゆみ

刀福川、夜泊

亮も浴て杉戸の障を夜の新く  
さよの舟山正月あえもなかりか  
あうりの笠をつくる掃ハらふ

九月十三夜もとを歩むるぬと音の

白圖

菅州 眉

岱青

仙布

卧央

魁門

支一音

賈友

清無うさげのすうくみぬと舎中のまこ  
共ふもくくくくく神に世川のまほし  
のそめハひとくひそふ古園の感りり

曉臺

少如

菓居

桂五

岳輅

大岡寺 槐女にけ

吾まりのゆきふハわぬまろけ

沙漢

るよる







梅柳をらくと枇杷の花ちりて  
夕の連歌をまよひてたたく  
盃にうけてあはれむ之日の月

暁臺  
士朗  
鳳

幸小將をふ志軍

人ハ以テ魚ウ一水カ

昭言の人あも幸の名跡うら  
史を燒く幸を懐むり沖の舟  
幸の日ををしく想は又お母  
ゆり々あう幸も川や岸お戸  
をいめどもお水流く幸ハそふ亮

羅城  
間毛  
騏六  
泉日  
青阿

落る苗の初て幸跡をくまは  
似合しや幸智人の革羽織  
深拂より梁さるく見ゆら  
くを伴の菴つあまら深拂  
市とゆきて幸ををらる

暁臺  
沙漠  
徐英  
圃曉

幸をぬねをふ角力のあをひ  
幸の市人よりけりを牛の尻  
幸の奥又りゆくを他の奥  
新幸おりもこくよりよ深拂  
燕の巣ををわすのあすけ  
人間の彩色元て幸のをる

士朗  
卧央  
五寅  
畦聞  
賈友  
鹿門



嶮崎小糸人ハ婦有り年ノ暮  
年もワ中日あり月何り天候ナ  
新幸や人も落つく整美の事  
年ノ暮梅の月間を恒長也  
おもゝろく又たり梅を陸夜毛

里采

岱青

紀鳳

岳輅

昆明

喜面子歌

笠寺やもぬ窟も喜うの  
あちりしと梅のむ  
附きぬを祈ふるつ見  
人々やいと春をゆる

驛六

士朗

満子

月夜家おもき藩園小月若きハ  
春夜をりくおふくむ一陽

山居

梅はくらく間を喜の面  
喜面や山のうすく月よき  
春夜をのうよとそねハ喜の面  
喜面のあらくと砂は更り也

逢坂を越日

春の面牛の顔を流るる  
喜の面夜半夜お似た  
よく笑も喜面の障

六朗

岱青

岳輅

物哉

羅城

桃睡

庭甫

越毛



二日降て喜中ぬのらう郡  
幼子の花中 喜ひや喜うのる  
梅の木のをくくふぬく喜のぬ

龍之席山

喜ぬや蕾采花枯花あふ日ハく  
ちのさめや夕日ふうのりやう炭  
けるのら免もく 足巻ハ袋押合  
喜ぬや朽葉あしむ花露田川  
喜ぬのぬ木のあふふおやある  
けりぬや枯木のふを降う  
喜ぬぬの星もよ合歌の喜り外

騏六 士朗 大年 玄く 閻毛 昆明 圃曉 蘭水 曉臺 兩曉

水碓の忠

多鶏啼と人のくは帯巻屋泊  
面降跡るうの花の川  
滌の束花巻やとてきぬら  
櫻ゆり且は眺のひりいす  
暁の月をうくふふは日と身  
白濁すく折し若花川ゆ  
女郎 花敷あ袖をぬきうけて  
おとハ情風破をきつてな  
うき風のふも返に帯の巻

間毛 曉臺 全 毛 全 臺 全 毛



母ふくくまて魚とりふゆく  
七五三切くハ枝の本の神罪すん  
明堂々名跡屋敷七五  
月のあつたふれ鳥のあわり  
灯ききゆりあをりあけう燈  
羊俵あつらりあ守貝吹て  
小浅まめたる僧を名なり  
花堂十日もあの花こころ  
夕夕さる子藤魚物こころ  
砂あふあふふりくまら  
入ふハはく車きりりり

毛 臺 毛 臺 毛 臺 毛 臺 毛 臺

餅こり神の鼓の音を  
櫓の火色く目あろ啼よる  
雪屋の半をききけるむさわりふ  
せんす(なま)の岸俗あらん  
あ吹碓礮の藪の音くもり  
縄つけておく櫓のうき板

毛 全 臺 毛 全 臺

宿坐

門あく水も汲す水鶏かく  
作向く鳴く鳥も月のま

楚分 關更



水鶏啼り第八層雲よりの川

岱青

醒井みきり

多鶏しりちりくわ海き流ぬが

帯梅

水鶏啼り夕ふちるうきし 杉葉

騏六

白妙ノやまふまきりて啼り水鶏

五周

豆の多鶏尻あなをぬきあけ

兩滴

水鶏啼り中川水く

青阿

多鶏ちりくちりきり妻との

曉臺

二人と八人きりきりのを啼り水鶏

紀鳳

啼りや免は多鶏尻えりちりやと

士朗

水鶏啼りや柳ら引りう二ツと家

白圖

佐屋の泊み

舟中福てまは多鶏の舟たぐく

ツミ

幹亭

依のめくも又降ぬや水鶏ちり

間毛

大風のうきくちりてちり水鶏

桃睡

むらぬみちるるとんきハ水鶏ちり

物哉

晴の巻

刈あそび

早稲あそびの晴の巻

十日お月の光る梓けり 兼

計之



落る苗をつむ袂ふあはるをて

士朗

ありの賛

鴨まてきりきりまきのたもと外  
ひくと鴨のまりし毎日う南  
財ぬか田縁の鴨のつそりき  
捨ゆ杉鴨のつそりきひり  
竹垣の外をそりり鴨のま  
鴨まややくてあけき足のと  
あちよろり鴨のま誂遠り

關更  
青阿  
万代  
梅虎  
昆明  
羅城  
桂五

三日月寺にて

鴨まてまの二日月は月たり

多宜

回

月流るくく鴨の夕う南  
鴨啼て旁のたひあるふもと外  
月生く鴨のつそりきひり  
夕暮やまのけし鴨のま  
鴨啼て舟の夕飯るふり

草之楓  
雨曉  
南溪  
米汁  
驛六

草菴の巻

粟稗ふそりくもあはるまの菴  
木のまらむらむら

丘  
卧央



うらあたるまのたのみの身出さる  
漁の海士お屋をもちす  
すんさきへ都ちういと細ひ巻  
最の花ちるあつらのあたるの

士朗

素凡

兄 央

間居

稻居まひひとり万載事り遠

薑 丈 芝

檀溪

赤おわく河り河原をわきて葉の烟

士朗

け白の深るらおもむきよふくきて  
ワせし又檀溪山中は尋ね入ぬ

附ハ二月の三日より彦のあまよとよき

そくありき巻のええはせハ

あまえく柳河り能く経所

岳 輅

隈くのゆきま林の中へいふか

蘭 水

山吹のこくまて歩き極く菊

間 毛

月代や紙帳よびる萩すき

白 圖

秋の夜の深うへよる垣うか

備 素 壁

屋根をまきまはさくそまふる

同 芸 門

幼時をくめてとも子時を指とす

春の赤やせ花散る花もやし

笛 青

くは方八時あり花散るそくある

魯 衛



長閑きや朝報宵露庭をり  
啼ぬ時ほくひんえたる維多  
あゝ林ハももあき林は光  
吾朝の松をえてあつ師定  
門口に松笠ひろふやう  
きりくは鳴や岸のぬきさけ

題画

養中の橋意しと啼りさるるを  
沸しゆ小蟬もあゝけり菴外  
口の右の梅ハつさくうをの  
春さしし海苔橋やの落月夜

帯梅

京百池

満子

騏六

大阜

圃来

入妻

羅城

曉臺

桃生

夕鳥や這海々やとの菴中菴  
萩咲く蛙揮出は小庭外  
藤鳴りて春をりゆり山家集

岱室

巨川

也梁

月の巻

月也あるたふも似守 二日月  
アの中をこのころかあつりなり  
ひよろくくと小まめさとの米也  
元てあーまき山 中 一 三  
様 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
ふふふふと年のゆらふふ

羅城

曉臺

城

臺

城



林卧

萩萩やとこしちもきりー二日月

二日月後の波みきりりりり

三日月の暮のまき合ふ光計

三日月ハ玉のかりりりりり

根をり子引あハ夕月候キり

月影てやとこ音るくく果なり

露のまき月のかききりりりり

林何某の萩路庭の木のやせ

...

士朗

羅城

騏六

蛭芝

卓池

岱青

桃膳

...

杉影のそや月あそそ音る

暮ぬ豊ふりせらめて三何れ

さうひみあ

二むくや三何れあそ杉の月

月の中一ふとの新あり流路

月をさあふり小車のは子のと

核ふりけつを流りつ歩り月見

月見まハ悲し一人を月み破り

平々に夜ハとりりやし杖の月

代くふ身り一人の泪り月の露

士朗

岳輅

吳井

岡毛

満子

岱室

五周

白圖



行くて帆送く〜ん〜の月

素元 青霞

月をたふす〜ふゆ〜〜の月

逸漁

さやけゆふの月の照りを〜の月

桂五

秋夜に月〜も〜く嵐の

卧央

風を抜く〜〜〜〜〜の月

蘭水

出の月や海〜えを〜〜

琵琶橋

万岱

月出て橋をた〜〜〜

南陽

秋園怨

撫松

秋園の怨〜〜〜〜〜

後月長き〜〜〜の余計

大阜

ひ〜〜〜の月〜〜〜

芦涯

あ〜〜〜年〜〜〜の元

丈芝

あ〜〜〜世〜〜〜

あ〜〜〜世〜〜〜

あ〜〜〜世〜〜〜

あ〜〜〜世〜〜〜

あ〜〜〜世〜〜〜

あ〜〜〜世〜〜〜

あ〜〜〜世〜〜〜

あ〜〜〜世〜〜〜







秋の中山あき

みーろを横をりふせもあき  
なとさハ啼き山をききす  
我若のききをほしき名ふけ  
墨煉るりとあきを拾ちん  
と出し月と思ハ杖をさし  
一本並ひあきをさるるやし  
門建て井の蔭ゆく水の柱  
夏の日を京へつてあき  
杳作る宵の念ゆふ目を閉て  
回しあきと年をむく

素槃

士朗

槃

朗

槃

朗

槃

朗

、朗

世に四十八



偏て何ふやハ驚き鳩の鳴  
 萩もすきも月ハ小らき  
 摺子の以つ秋ふり根の枯て  
 陣張つく板を挽こる  
 ひくくと簾揚をもる朝日影  
 眉巻めくり小虫ほほ初花  
 穴一張砂かきちらは喜の草  
 逐きてを中て扇るし鳥  
 そつとくくく物を山家すし鳥  
 萩明くよよと習ふ鳥  
 小言をさるるを小袖みたる也

朗 葉、朗 葉 朗 葉 朗 葉 朗 葉 朗 葉

這ふ響のあな面なき人々や  
 手よも取まぬ鳥を覚て  
 抱の魚よらの風吹くより  
 夢よ又砂る三日月の  
 編ふ衣を摺く柳ハ葉を分り  
 枯の流砂下総よ入る  
 大風の扇くくく又響く響の響  
 萩の鏡のちくくくくく  
 袖す小寂しき沙汰のつらさを  
 摘やはますや若菜のくく

葉 朗、葉、朗、葉、朗 葉



こまする可又花の雪も出さず  
同じ旅病を伊勢の菓子賣  
身の平ふ違をてんくるたき  
風の儿情まほ せくれ

朗 磔 朗 磔

岐阜あき

鴨の舟消て長良ふ煙のむら  
むしろ引はる短衣あき月  
白雲はてば乙女の神のまら  
櫓の吹ぬ末ハなかりり  
木とてあき 節を振らるる巻

士朗  
素磔  
磔 朗  
磔 朗

山田山田

後河原ハも和言を引かきを  
ぬくりくや出る冬の日  
少甚小神のやもあはるらん  
何をくらふともんぬ番ヶ家  
草履干はそあらあらり入丁の巻  
あをれ燈りの切くる杖 系  
人良小消る斗の月 照るて  
扇の中をわし知てり  
大谷やあき中山法閑寺  
駒も頬白もあきりよくあき

朗 青 磔 朗 青 磔 朗 青 磔 朗 青



編張小耐く花の魚たり付  
眼を志同る喜柿の糸  
岩小せく水のやうなる意を  
膝のゆくり小志は以て  
子世等もそくくするを思ぬん  
於もくきまて喜まを菊  
風呂姿みくふの風雅を元ちじ  
露の寂蓮月のお忠岑  
落る齒を秋の名跡となるや  
柿動りん移むの意  
又第の早崎の塩焚体

青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗

尾並たりく笠寺の坊  
芒ちる衣小袂買ふ便く  
花とつ枇杷をくまてきりなり  
今朝くく小笠を遁れり人そま  
尼小交りておく川  
むく雲は北斗影影をかくは  
ぬるき都の賦をき書て足る  
嘗ふ十日あまりの高かりて  
このゆりくく花のあらし

青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗



徳屋のやうと

月 浅戸水鶴啼 秋の暁のこ  
海よりみよははくく 暮山  
何うくくと一押は紅のを喫て  
小麦の葉をかつくむね  
年々ぬ人の顔子を見ては  
水へ這出る 庵の 遠り本  
ちつはけふ猿も衰きを鳴やん  
きえく又きつと 朝のよも火  
あけいと夏の襖を押やうり

素葉 岱青 羅城 士朗 岳輅 紀鳳 白圖 素葉 岱青

雲をまゐるやうハ 抱ッハ  
秋の初建後の藤系乃細く  
みうんを喰ハひとり小きき  
月の朧ハ昔の人を泣きたり  
ちつとくと 騒々々々 浪  
名も知ぬ峰の嶺りの守りて  
加茂の社又多きうく 藤  
四五尺の初花梅咲おけり  
主殿の堂をかふる 鉢 賣  
まを信む人はさうく 此のてり  
連衣の料又後る 葉 船

岳輅 士朗 素外 物裁 白圖 紀鳳 羅城 素外 物裁 方明 少如



四方山ハ書ハ親色の定りて  
 延至  
 わやろくわろく関を尋る  
 布泉  
 中葉の白ひ小向ふ花もすろく  
 素磔  
 小葉の風のりろくくく  
 昆明  
 時としてハ水の音ささくく  
 騏六  
 洞小うつる 卧 佛 の 良  
 徐英  
 娘玄のきのふの輿を下さばて  
 岳輅  
 踏上の泥も 々 々 花  
 五絡  
 々々々 花月見の招き寄馬  
 羅城  
 花月見人の老 神る 花  
 士朗  
 世山花月見も吹くろく 秋の風  
 信入 雅近

辰巳坊 花りろくく 花西  
 同 甚明  
 吟二句ハワケ 玄雅 近々 伊勢  
 ほうての儀 花の玉いふれやと  
 懐より言 花把園 又指来るを  
 ついておろろくくハ花の聯句  
 こそち入ぬ  
 山涼き伊勢の依家小文をやり  
 霍洲  
 不やして見る臺の小 小 或  
 紀鳳  
 ちりやる花ふりとりと日のくまを  
 白園  
 舟の帆ををかり 出れをり  
 騏六



愛在於人而不在於物 甘棠之為  
本豈有愛哉 蓋思其芟斲為我  
園有 蕉翁手植之杉 辛亥之秋  
大風不拔 杉把之大斲可復 培也  
伐以材之友人 墨山子懇求不止  
手造 翁像乃安其家 眉角骨相  
是謂克肖 非吾所覲 止胡謂是  
也乎

寬政丙辰二月

知足六世孫傳芳識



枕草子

開眼之俳諧

目も鼻もひらくをのへ梅の花  
 舌底を弄りてむあつるきのそら  
 鞭あつる豹のふも長糸又て  
 手よかき浪守水の志く砂  
 升原よき山彦のひくらん  
 椽のとやめて秋ハニ くらり  
 ひやくと月をみてやけ琵琶の音  
 宣言の候 菘をわけ来る  
 岩橋のちうき海川と詠免やり

士朗

大魚

卧央

方朔

盛青

士峰

辨二

墨山

丈左



形くのあきまゆふりくま  
 木菴ハとかく苗ちなる床柱  
 車のうち砂硯つめとくま  
 かまハちる世のちまき采依て  
 きのみの色うくまも又ま  
 ぬくぬ玉の并ひあひま  
 筑紫の恨りうまくへま  
 有明のあきまのま影なて  
 ちあハ我 家のりまきりり  
 ちあくと緒うの樵のとり出  
 松の下まてはほきまきあま

黙鳥 羅城 大鵬 帶梅 叱如 方明 大阜 玉席 朗 魚 夾

吹風も一本の花よとむらん  
 奈良の都のまハ眠たまき  
 うち連て屋根にたの葉ま近  
 さもすまあうりよま酒のある  
 一と玉の人を尋るあまりま  
 そありとまま十舟の菱菰  
 希菖蒲白きまのあつまを  
 まま落かき鼻の厚あひの山  
 翠古の石をいらも捨ひ出  
 こらへまま福るまのりの犬  
 先僧のいのちまの佛よて

朔 青 峯 左 山 城 鵬 梅 如 明 阜



膳あゝふやと流せありたり  
 風のくけや流せふ津の又難れ  
 風も恋しく思ふこひ  
 陵も岸もぬれをみ萩の  
 水冷しき 産卵の 呼吸  
 抑しやんそ指たる耳のち  
 ふるま袴の紐たむと しま  
 ねくふうき煙の影を  
 百年の年ふぬ 降  
 院と糸の人の袂に  
 杉の板戸もふほふ 曙

岸 朗 魚 央 朔 青 峰 左 山 洞 里 鵬

山形井の掃除はひくと  
 灰すふきなる 肴とり  
 桐の葉を引くふをたる  
 おまの蒼きなるき 報  
 畑中よひとり家もつ暮  
 不二をさるるよさ  
 櫻咲さくらの花の八重  
 うちうささるりこ  
 魚 白 杖 麗人 城 喜

梅 妙 明 阜 帛 英 士 城 喜

百韻下略



士峯大魚り需よこ

風羅翁のこころを偲る

瓜沙きをよめるのく向きて刻を

墨山

香華二句

陽炎を詠まよとの歌法師

辨二

雪うへ今必なる花のあはれ

傳芳

卷七句

燕くと花よ沈むり嵐山

曉臺

西ふ山の柳花浪のこころ

大鵬

あつはけこやう又咲たり

越巢

春朝の花よ来て蘇へ獅子次

文岡

一筆つゝ霞き花の静なり

紀鳳

春もすうゝ花のちきりそ花枝

牛有

しやまはふらふ西をたのち句

京文左

山吹四句

一とと花山吹咲ぬ静け花

徐英

ひとねしよ夜山吹の涙の白

大阜

やまふきのちきりきさのふの暮の春

祐之

山ふきやとちきりねも花の上

龜年

草四句

わうまや折ふしよ人の歌

士峯

山とりの鳥のこころ

玉席











松風のこゝろふ栞や扇をうつ  
煉掃巾風よ吹く佛を  
冬の栞や掃巾うつり冬の松

間水右は細く黄葉ふたは

連りきや物懐きなる

行くてくはふふたり秋の山

花を栞より吹ぬる松も石

秋風のそとくあけある龍

蝶々の心奪ふは秋のそと

湖上

魚糸る様をおきつり鳥

大魚

才明

士峯

青霞

詩栞生

尼壽松

羅城

批七終二下六

桐一葉ふちるやひともの  
春の一夜をこゝろふ栞の山つき  
冬の日のひとり栞ふは飾り

岳青

岳輅

水雲



是ハ長途のあまらるひ  
 浅子ハともりの嵐はあめ  
 たるをりふりの中とてつ  
 尾張のふま古く持借つる  
 人のちりたるを 蕉翁百集の  
 序を鑑み 予の志は津まかく一筆ぬ  
 今や羽をばたきゆくへの結縁はもと  
 因してこよあらしのゆりぬ



寛政八丙辰二月  
 盛青  
 大魚  
 士峯 撰

批七終二五

松硯序

才海松硯といふも松あり  
 是ハ武隈の松とてふるまのく  
 人松松久り書留を録りお  
 踏松おつら松とて筆をたふ  
 るよるるそのとる  
 友人松青うまら一切のまて

松硯見







み〜おやをておされ〜る菴のみ  
わ〜勢〜すあるの拵なり圍むら

全 羅城

ハ巢石と飲

月の出ハきのふふはり部々  
家のくまりよ笑のこけ志  
居ふも木村角のふ〜〜  
人の袴をと〜り〜よある  
世ふか〜る〜も伊豆を結〜  
之〜もをれ〜免〜遊〜ふ〜

伯 雨 城 壺 伯 蕉 雨 羅 城

批七の二上三

坐表のま〜あ〜あ〜〜は〜ち〜き〜れ  
人運を〜お〜お〜の〜あ〜〜 浪  
今〜あ〜る〜小〜生〜約〜の〜峰〜の〜あ〜る〜を  
無〜に〜さ〜〜〜や〜馬〜の〜鞍〜垂  
唐〜の〜戸〜を〜急〜の〜鼓〜又〜押〜〜  
菊〜の〜御〜堂〜も〜羨〜の〜二〜と〜を  
急〜の〜月〜露〜の〜摺〜子〜う〜ち〜お〜ひ  
ハ〜急〜一〜船〜を〜出〜す〜む〜の〜喜  
大谷の蓋を焦〜〜てを〜〜り  
吃の玉鼻〜 碓 石をり今  
お梅又ちきお梅を結ひ月

雨 城 伯 雨 城 伯 雨 城 伯 雨 城



謎くしけくをぬす こそ  
囚人の琵琶もやうきききき  
障子の外ハ雪の甲斐う根  
結願しきいなる指の仮板  
一ををぬつて無きをうしる  
縁ふさうる鼻のせんそ日の暮  
こけあろく移る極女 二人  
植すまきも秘の小橋を垣根め  
序をを結風のうしうし  
何も角も月夜ををぬこのほ  
唯ま折くまの夜のをむしりあ

伯城雨伯城雨伯城雨伯城

批七歌三三五

人形を見くハ見ぬ九しん  
言腐をれと面やぬしん  
ちうりわらと舌を結く秘あす  
團そらうしうわりも守うか  
栞の富よ古きいしあをまきけ  
煙くそしあ 池の 水き  
新花の興よさるまきむしう  
松のすしんをうしうしうふ

伯城雨伯城雨伯城雨伯城

諏方湖と



ありし面のよき山よりあつきの山  
 さあけ風の吹きまはる 浪  
 明くわのよきを推と浪よけて  
 人伝あつきのうら 浪のうけ  
 笛の音もよきまはる 浪  
 一曳子ひく杖の音  
 十の指七ツの音の音あつて  
 伊勢で伊一杖持あつて  
 さつ子あつてあつてあつて  
 空やの海とけいてあつてあつて  
 園の草花とけいてあつてあつて

批七終三上三十五

羅城 素城 城 城 城 城 城 城 城 城

歌くもむいあつてあつてあつて  
 すすきあつてあつてあつてあつて  
 花の音をよきあつてあつてあつて  
 月花の音もよきあつてあつてあつて  
 あつてあつてあつてあつてあつて  
 ねもあつてあつてあつてあつてあつて  
 ねもあつてあつてあつてあつてあつて

城 城 城 城 城 城 城 城

天明癸未の秋山裂が穀機  
 人民あつてあつてあつてあつてあつて







山根を切りくさるるを以て  
雨くわつき風吹材の云  
ちきとせ禱の世をのうれうぬ  
乙の子ハ代御坊と集すや  
二枚つんころりと徳も賀着の妙  
富の奇くよはるるをわらう  
水もいのか中一立の膝  
志のふ山の月のむうを志ん  
机のふま筆の版をうら  
唐くまき局は香の雲ありて  
ひぢりま山神おろるる着解

毛 城 毛 城 毛 城 毛 城 毛 城

紙七拾三上三五

御旗の太師もすそをうら  
石の甘露滝の物流ひく  
三尺よたぬ英はあつり  
陽の男火もひよまある  
跡は云折をうら山刀  
いらつも糸よらふきの芽

毛 城 毛 城 毛 城 毛 城

さき第う山草をいさ出さ  
しりあの中ます光るのく  
を初ひさるる妙地ハ帰法を  
物一く戸隔草井高田を



河く出や崎古其の黄を  
者く〜又り〜て八月甲の  
辰卯相の玉家信子水を  
辰へ年す〜と十月 冒善書  
まらり入ぬ

妙東茶禪釋伏

南無阿弥陀佛の相ちのうも月望  
十程の〜を〜を〜を  
枇杷の志すけ〜を〜を  
ぬき捨〜を〜の古 机  
木の苔風の書戸はからり

羅城 柳莊 五什 左鼻 莫二

秘七款三三六

筆力よよ〜と〜の〜白 雪  
山吹を〜を〜を〜 女産  
ほのう〜と〜を〜を 托  
ひよ〜と〜の〜を〜を 凡化  
を〜を〜を〜を〜を 杜厚  
飛鷹非を〜の〜を〜を 莊  
軍の〜の〜の〜の 城  
相〜の〜の〜の〜の 鼻  
阿波の〜の〜の〜の 什  
お〜の〜の〜の〜の 言  
西の〜の〜の〜の 二

希言 務左 文兆 凡化 杜厚 莊 城 鼻 什 言 二



出代ハ花子障々ぬものかまハ  
 タウけうけく鷓鴣あり  
 ほよあぢふ人の遠き甚とれく  
 弟はく白の体むむ一ろ戸  
 獅子子母のもよりよそのを思ひ物  
 世あろあろは肩ハ落さ  
 芦垣の一年も雲の志る一  
 若葉たれろ一ろを思ひ物  
 ほつくと雲を思ねろ灯一  
 津き出さう又ともの心よ  
 川舟をさす汐時よわ一子

北七歌三上三九

北 左 厚 化 城 莊 什 臯 二 言 左

村のうらすりさうくや  
 心あぬ笛のを言の村の月  
 音あ引けらきぬのよ  
 りわきを檣垣の屋よの守を  
 狐の告一井又蓋を する  
 中くよ乞食の子のかことよ  
 日の入るの談言う 律  
 棹さすハ前を思ねろ舟をさ  
 眠りさ免さる 社 法 妻 凡

北 化 厚 莊 城 什 言 左 兆



寛政丁巳冬十月

羅城記

枕七巻三上四十一

跋

ははきさのふせやをたつねてうの  
はらをめぐりつたうつらにうらむい  
のちのうけはしをわたりみすすり  
るをきえうすはしのふじををとの  
うあをいいたごとおはすてさらしな  
をさまよひよしみつてらめひり



りにいこころをすすしうして  
 ひとひととつらりいたせめんとを  
 こころにしるすきさうたのきさうは  
 またたかくつゆのらささとさにあ  
 まむせり



批七卷三上里

蘭藥鏡原 全部五卷内草之部三卷出来

此書ハ源名「獨魯傑列印」ト云フ和蘭本草集成ノ書

ヲ譯スル所ヲ金石草木鳥獸昆蟲及ヒ造醸等ノ類ニ至ルテ

一ツモ残ヌ所ナク一品ヲトニ和漢ノ名ヲ記シ其性ヲ温涼能毒ヲ辨シ其外

彼邦ニテ製煉ノ術ニヨリテ藥精ヲ取り露水ヲ製ス膏油酒醋

等ヲ製造スルコトニ至ルテオヨソ藥物ニアツカルノハ微細ニ

コレヲ論シ精密ニコレヲ辨セル可ナリコレモヨリ醫家ノ

経續ノミニアラス凡博物ノ諸君子ノ萬邦ノ名物ヲ搜採

研究スル必用ノ珍書ナリ 尾張 東壁堂主人謹識



